

2020/08/30

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑬

『自己否定の解決』 ヨハネ 5:1-18

■よくなりたいか

「その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があって、五つの回廊がついていた。その中に大ぜいの病人、盲人、足のなえた者、やせ衰えた者たちが伏せていた。」(ヨハネ 5:1-3)

ベテスダの池は、おそらく間欠泉のようなものだったのでしょう。不定期に水が動くことがあり、その時最初に池に入った人の病はいやされるという伝説がありました。そのため、毎日多くの病人が池の周りに集まっていました。

「そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた。イエスは彼が伏せているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。「よくなりたいか。」病人は答えた。「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」

(ヨハネ 5:5-7)

イエス様は、38年間病気で苦しんでいる人に目をとめ、彼に「よくなりたいか」と声をかけられました。この時イエス様は、わざわざ「からだの癒しに限定しない言葉」を使って、「よくなりたいか」と聞いておられます。「病気が治ってほしいか」ではなく、心の状態も全て含めて、「すべてが良い状態になりたいか」と尋ねておられるのです。

すると彼は、自分の本当の苦しみについて訴えます。それは、「孤独」です。彼にとっての苦しきは、病気そのものよりも、自分を助けてくれる人がいないことだったのです。病気は確かに苦しいものですが、それは本当の苦しきではありません。

本当の苦しきはいつも心の奥底にあります。見える困難に出会うと、その隠された苦しきが表面に出てくるのです。彼にとって、それは自分を愛してくれる人がいないという苦しきでした。イエス様はそのことを見抜いて、病が癒されたいのかと尋ねるのではなく、「よくなりたいか」とお尋ねになったのです。

私たちが共通して抱えている、心の奥底にある本当の苦しき、それは「自分はダメだ」という自己否定です。

■自己否定の解決

この世界では力を受けると反発するエネルギーが働きます。例えば、重い船が水に浮かぶ

のは、水を押す力に反発するエネルギーである浮力が働くからです。

同様に、私たちの行動は、すべて反対の力が働いていることによって動かされています。例えば、誰もが持っている「人から良く思われたい」という思いは、自分の中にある「自己否定」に反発する運動です。その「自己否定」とは「死」です。「死」が「いのち」を否定しているため、それに反発して、「私は立派な人間です」という働きを生み出すのです。それが認められないと私たちはつらさを感じます。

ベテスダの池のほとりにいた男性の苦しみもここにありました。助けを求めても助けももらえないという事実はきっかけに過ぎません。自分を認めてくれる人がいないという孤独が、彼にとっての問題だったのです。彼は「良くないたいか」と問われ、そのことに気づきました。

「イエスは彼に言われた。「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった。」

(ヨハネ 5:8-9)

イエス様は、彼がイエス様のことばを聞いて信じるかどうかを確かめておられます。なぜなら、自己否定という問題を解決する方法は、イエス様のことばを信じるしかないからです。

以前イエス様が、息子を癒してほしいと願い出た王室の役人に、「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」(ヨハネ 4:50)と言われたのも、同じ理由です。彼はイエス様のことばを信じて帰途につき、帰る途中で息子がいやされたことを知りました。

神は私たちに信じることを訓練なさいます。迷信に頼るのではなく、神に頼る訓練です。それは、そこにしか解決がないからです。

見える病のいやしは、本当の解決ではありません。私たちすべてが抱えている本当の病は、自分はダメなものと思い込んでいることです。私たちは、行いを頑張って人から認められることで、この病を解決しようとしていますが、それではいやされません。神だけがこの病をいやすことができるのです。

イエス様は私たちに、あなたは良きものだと言い続けておられます。その最終的な証が十字架です。イエス・キリストが、罪人である私たちのために十字架にかかったのは、神は私たちを良きものと信じておられるからです。

哲学者は、私たちが認識しているものは、現象であって本体ではないと言いました。本体を知っているのは、神だけです。私たちは自分自身についても、現象を認識しているだけで、本質は見えていません。だから、自分はダメなものだと思い込んでしまうのです。

しかし、神が知っているあなたこそ、本当のあなたです。「あなたのために十字架にかかっても惜しくはない」と言っているいのちを投げ出すほどの価値があなたにはあるのです。キリストはそのようにして、あなたの本質を示してくださったのです。

自分の本質を知りたければ、神の言うことを信じるしかありません。自分の知恵や知識に頼って、自分が知るところだけの自分で生きようとする、自分はダメなものとしか思えず、孤独という苦しみを味わうことになります。そして、困難にぶつかるたびに、この問題が頭

をもたげ、自分は不幸だと思ってしまうのです。イエス・キリストを見上げ、そのことばを信じることしか、この問題の解決の道はありません。

■行いで人を判断しない

「そこでユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った。「きょうは安息日だ。床を取り上げてはいけない。」」（ヨハネ 5:10）

安息日は礼拝の日なので、いっさいの仕事をしてはいけないと決められていました。もともとは神が定めたことですが、人間はそれに細かい規定を加えて、していいことと悪いことについて、実に細かいきまりを作っていたのです。床を取り上げるのは、まさに「仕事」であって、「安息日にそんなことをしてはいけない」とユダヤ人たちは言いました。こういう考え方を「律法主義」と言います。

人が律法主義に陥るのは、自分を愛してくれる人はいないと思っているからです。律法主義とは、ルールを守ることで自分を認めてもらおうとすることと言えます。行いに自分の価値を託すのです。その代表者がパリサイ人です。

「しかし、その人は彼らに答えた。「私を直してくださった方が、『床を取り上げて歩け』と言われたのです。」」（ヨハネ 5:11）

人々に責められた男性は、「私は言われたことを信じて行動した。どこが悪いのか。」と答えました。このように、やみくもにルールを守るのではなく状況に応じて何が大事かを考える主義を、「律法主義」に対して「状況主義」と言います。

形を大切にする人と何が大切かを考える人は、いつの時代にも存在します。たとえば、神は人を殺してはいけないと教えています。これは実際にあった話ですが、アメリカ先住民と白人が戦いをしていた時代、男たちが出かけた後、女性と子どもだけが残されたとりでに、先住民たちが襲撃にやってきました。こういう時に備えて、とりでは隠れ場が用意されているのですが、隠れ場の中である赤ちゃんが泣き出してしまったのです。母親がなんとかあやそうとしますが、赤ちゃんは泣き止まず、このままでは見つかって皆殺しになってしまうという状況の中、その母親は赤ちゃんの口をおさえて泣き声を止めました。その結果、先住民たちは気づかずに去っていき、皆は助かりましたが、赤ちゃんは死んでしまいました。

この母親のしたことは、律法の上では殺人です。しかし、彼女の行動によって、多くの人のいのちが助かりました。実際、赤ちゃんの泣き声で見つかってしまい、全員が殺されたとりでもあったのです。いったいどちらを正しいとすれば良いのでしょうか。この母親は、殺人者としてしばり首にされるべきなのでしょうか。

イエス・キリストの戦いは、まさにこのような律法との戦いでした。イエス様は、一貫して「行いで人を判断することをやめなさい。」と教えておられます。

■神は人が求める前から働きかけておられる

「彼らは尋ねた。「『取り上げて歩け』と言った人はだれだ。」しかし、いやされた人は、それがだれであるか知らなかった。人が大ぜいそこにいる間に、イエスは立ち去られたからである。その後、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた。「見なさい。あなたはよくなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるかもしれない。」(ヨハネ 5:12-14)

いやされた人は、自分をいやしてくれた方が誰なのか知りませんでした。このように、私たちは自分が神の恵みの中にあることを知らず、気づかないうちに、多くの場面で神に助けられているものです。

私たちが神を知らなくても、神のほうから私たちを見つけてくださいます。人間の側の働きかけによってではなく、神の呼びかけからすべてが始まるのです。私たちが苦しんでいる時、神はあなたを放置しているわけではありません。神は呼びかけ続け、人はそれに応答して救われるのです。神は決してあなたを見捨てることなく、声をかけ続けてくださっています。

■罪と病気の因果関係

さて、イエス様は、「見なさい。あなたはよくなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるかもしれない。」と言われました。この「悪いことが起こるかもしれない」とは、罪を犯したらもっと悪い病気になるという意味ではありません。罪のために病気になるわけではないことは、次のイエス様のことばからもわかります。

「またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」
(ヨハネ 9:1-3)

「神の力は弱さのうちに働く」と、イエス様は言われました。病気で苦しんでいるならば、そこに神の栄光が現されるのです。罪を犯したせいで病気になるわけではありません。

では、イエス様が言われた「悪いこと」とは何でしょうか。この部分を直訳するとこうなります。

「もっとわるいことがあなたに起こらないために、もう罪を犯してはなりません。」

神にとっての罪とは、道徳的な行いの過ちだけを指すものではありません。むしろ、罪と

は神との関係におけるものです。イエス様は、行いになる前の「思い」も罪であると言われました。つまり、罪とは、神の思いに反する思い・不信仰です。神の言葉を信じようとしないことが罪なのです。

イエス様は、彼の体の病だけを直したのではありません。「あなたは一人ではない。あなたは愛されている。」と伝え、本当の病である心の病をいやされました。つまり、ここでイエス様が語っておられるのは、「あなたが私のことばを信じようとしなければ、また苦しくなりますよ。」ということです。彼はかつて神のことばではなく、世の中の言い伝えを信じていましたが、これからは「見えるものではなく私を信じなさい」とイエス様は彼に伝えました。そうでないと、また孤独に苦しむことになるからです。

「再び孤独に苦しむことがないように、神のことばを信じなさい。」、これがイエス様の真意であって、罪のせいで病気になるなどということは決してありません。

■迫害は栄光に変えられる

「その人は行って、ユダヤ人たちに、自分を直してくれた方はイエスだと告げた。このためユダヤ人たちは、イエスを迫害し始めた。イエスが安息日にこのようなことをしておられたからである。」(ヨハネ 5:15-16)

こうして、この人は自分を癒してくれたのはイエス様だと知りました。このことから、私たちは自分で気づかないうちに救われ、神のことばを聞くことでイエス様が救い主であると知ることができるという、救いの流れを見ることができます。そして、彼は、自分を救ってくれたのはイエス様だと人々に伝えました。これが伝道です。家族や友達に伝道するとは、「自分はイエス様に救われた」と告白することです。

ところがこの時、ユダヤ人たちはイエス様を信じるどころか迫害を始めました。このように、伝道を開始すると迫害が起こることがあります。それは、イエス様のものの見方とこの世のものの見方が異なるためです。この世は人の行いを問題にし、行いで人の価値を判断し、律法で問題を解決しようとします。しかし、イエス様は行いに関係なく、たとえ罪人であってもあなたは良いものだから安心して行きなさいと言われます。それは、イエス様は人の本質を知っておられるからです。このことに対して律法による人間の価値観は反発するのです。

しかし、迫害されるときこそ神からの平安を覚える時でもあります。つらい時、人は本気で祈ります。その時、神はものすごい力を持って私たちを慰め励ましてくださり、私たちは言いようもない平安に包まれます。そして、その迫害が栄光に変わる時が来るのです。

キリスト教もこの後、ローマ帝国による激しい迫害に会い、地上から消えてしまったかのように見えた時期もありました。しかし、その後はどうでしょうか。ローマがキリスト教布教の拠点となり、全世界に福音が広がったのです。

神は迫害を栄光に変えられます。ですから、迫害されても救いのために祈り続けましょう。その時こそ、本当に神の慰め励ましを得ることができます。

「イエスは彼らに答えられた。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです。」このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである。」(ヨハネ 5:17-18)

神は24時間いつでも対応して下さいます。ですから、私たちはいつでも神に助けを求めることができます。

さて、この時イエス様が神を父と呼んだことによって、ユダヤ人による本格的な迫害が始まります。そして同時に、イエス様は、自分は三位一体の神であるという神の真実を本格的に語り始められるのです。